

# 佐渡の子どもたち

— 佐渡郡赤泊村ほか —

## 毎年高校生の八割が島外へ

高等教育機関設立は島の願い

佐渡では毎年千人近い高校生が巣立ち、そのうちの八割近くが島を去ります。進学者は大学・短大、二百数十名、専門学校三百数十名、計六百名近くが島を去ります。高等教育にかかる教育費の島外流失は大きいものです。進学にかかる費用を一人一年で三百万円と見積もると島は毎年十八億円のお金を失っています。この他に島外に就職する高校生がここ数年間二百、百人、この労働力と生活費の流失も島の活力を弱めます。

佐渡の高校卒業生の進路状況

進路 年度	学 校		就 職		家 事 その 他
	大学等	専門学校等	島 内	島 外	
平成 元年度	245 (23.9%)	363 (35.4%)	145 (14.2%)	256 (25.0%)	15 (1.5%)
平成 2年度	237 (24.5%)	354 (37.0%)	130 (13.6%)	224 (23.4%)	11 (1.2%)
平成 3年度	225 (22.5%)	358 (35.9%)	135 (13.5%)	255 (25.6%)	25 (2.5%)
平成 4年度	226 (24.8%)	337 (37.0%)	127 (13.9%)	194 (21.3%)	27 (3.0%)
平成 5年度	245 (26.5%)	327 (35.4%)	175 (19.0%)	142 (15.4%)	34 (3.7%)
平成 6年度	236 (26.5%)	367 (41.2%)	142 (15.9%)	107 (1.2%)	39 (4.4%)
平成 7年度	249 (30.0%)	375 (42.0%)	167 (18.8%)	83 (9.3%)	16 (1.8%)

「佐渡広域市町村組合のまとめ」から

「佐渡広域市町村組合」の基本計画は佐渡の高等教育の課題を「地域の特性を活かした魅力ある大学、専門学校を誘致し、広く有能な人材の地元定着を図ることと地域との連携による産業の振興を図る」と方向づけています。この計画が早く軌道にのることはなによりも高校生、その親達地域の人達のおおきな願いです。

島には高等看護学校が一つあります。毎年  
の募集定員は三〇名ですが、佐渡の高校生の  
入学者は毎年その半数です。

この数年、高校生の卒業動向に少し変化が  
見られるようになりました。就職者と家事従  
事者で島内に残る卒業生の数が約一六％（一  
九八九年）から約二〇％（一九九五年）に漸  
増し、島外就職者が急減しました。一九九五  
（平成七）年度の島外就職者八三名という数  
は一九八九（平成元）年の二五六名の三分の  
一以下です。

「バブル経済が破綻して不況期に入ったの  
で、関東方面や特に新潟方面の求人がへった」  
「少子化の時代にはいって子ども達も親も島  
外に出たがらない、出したがらないからだ」  
「はじめから家業をつぐ気である生徒たちも  
増えている」「役場やホテルの採用も続いて  
いる……」等々の理由が考えられると進路指導  
の先生方はみえています。

家事、その他いわゆるフリーターでしばら  
く過ぐす高校生もこの数年で倍増しています。  
その理由は就職難だけではないようです。

佐渡の各地で村おこし、町おこしに頑張ってい  
る人達に、わが町わが村の子育ての願いを聞き  
ました。

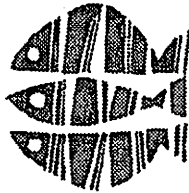
蟹のめしたきはやめじゃ  
働く人たちの文化協同の輪をひろげたい

民話の里・赤泊の菊池太一さん

「蟹の飯炊きということばがあります。大  
人がぶつぶつばかりいっていたのでは、若い  
人達に目をむけさせる地域にはならないし、  
若い人たちは大人にもならないと思います。

私たちの遠い祖先がきびしい環境や生活  
の中で、美しくしかもたくましく語り伝えた  
のが民話です。それはまさにいきた教育とも  
いえるものです。子どもたちに教育を受けさ  
せようにも、その機会に恵まれなかった時代  
の教育手段でもありました。

村づくりの原点は人づくりからです。……  
人間の集まりから新しい何かが生まれてくる  
と信じています」。



これからの佐渡人は「選択住民」  
佐渡のリストラを担うすぐれた人達だ

創造衆さろん・もん 田畑秀樹さん

井上ひさしの「吉里吉里人」共和国と同じ発想で生まれたわが町真野の「アルコール共和国」は地域づくりの一つです。その後、竹下首相の唱えた、ふるさと創生、にのった地域おこし、町おこしが各地に起こりました。

その頃二十歳代だったわたしの感覚と何かが違うと感じていました。地域が変わるということは本来発的なものではないでしょう。自分が本当にやってみたいと思ひ、ワクワクして目がきらきらかかやくようなものをおたがい自由におきあつていく。その中で地域の若者が動き出すのではと感じたのです。自由に意見がだせる「考え方の自由市場」オピニオンフリーマーケットがあることが前提です。こんな気持ちでいた若者が集まり「面白いな是非やってみようよーよし、おれも乗る」と様々なことにとりくんでいく会ができました。

佐渡の次代の担い手が生活の中の「共感」

を探し、その輪のひろがりを感じわないでつなげています」。

地域にささえられて子育て

太鼓集団 「鼓童」 大井キヨ子さん

佐渡に新たに生活の場をきずき始め、長男が生まれて十四年がたちました。小木町深浦地域で私の子もふくめて「鼓童」のこどもたちが温かく育てられています。

「鼓童」の前身、「おんでこ座」のころは、全員独身でしたが、座の方針で新聞もラジオも聞かないというこの世と隔絶した太鼓集団でした。島中を走り回り太鼓の稽古をしていた得体の知れない若者たちが私たちでした。十年という歳月が過ぎた頃、活動方針の違いから私たちは「鼓童」として独立し、地域の人々の中で生きる方向を模索しました。

子どもが生まれ、子どもたちは待った無しに育ち、保育所から小学校とあがりました。わたしはまだ肩肘はって「鼓童」の肩書きを背負って人と接していました。地域の人達はそのうちありません。一人の子の親であると

同時にみんなの親でした。どの子にも声を掛ける親でした。この声かけをたくさんしてもらった子どもたちの表情はとても豊かです。授業参観は父母の会だけでなく祖父父母の会もあり、いつも全員出席です。ここは安心して子どもを遊びにいかせられる地域です。わたしは地域での子育てというものは一人の子どもの親として自分をさらけ出して付き合うことなのだということに気が付き、気がとても楽になりました。

いま「鼓童」は地域の人から田んぼを借りて農作業をしています。腰をしっかりと据えて土の匂いのする太鼓を打つためにも必要なのです。

### みんなで育てる片野尾の子ども歌舞伎

取材―藪田亨 三國屋寛 文―田中要

明治の中頃から愛好者によって始められたというこの歌舞伎は戦時に中断しましたが、「村おこし」ということで一九七七（昭和五二）年復活し、以後、大人歌舞伎、子ども歌舞伎を隔年ごとに上演しています。今年（九

六年）は第九回子ども歌舞伎上演の年です。衣装、かつら、いろどりから科白、所作はいうに及ばず三味線、浄瑠璃の語りにいたるまでそれぞれが分業し見事に演じます。

子ども歌舞伎は今、学校の「ゆとり」の時間に組み込まれ、PTAが後援しています。「いきいきスクール」の予算もここに充当されます。子どもたちは歌舞伎保存会の主だったひとたちの厳しい指導をうけます。

十月二十七日が上演の日です。この日は片野尾の集落あげてのお祭りの日になります。島内のゆかりの人達はもちろん、島外から愛好者や先輩がきて小学校の体育館はいっぱいになるはずで

嫁不足、婿不足をなげく島内でもここだけは例外です。郷土愛がつよいのか、ともかく若者たちは嫁をつれ、婿をつれUターンしてきます。若者が若者を呼び、スポーツサークルもできて、集落は活気がでてきました。

スポーツをしたあとも飲み食いの会でまた結束がつよまります。その若者たちは片野尾の二十一世紀を担うにちがいありません。

（本田敏彦）